

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2272100311		
法人名	有限会社 アイエヌビー		
事業所名	グループホーム「いっしょに暮らそう」		
所在地	静岡県富士宮市杉田1020-2		
自己評価作成日	平成23年2月4日	評価結果市町村受理日	平成23年4月28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigo-kouhyo-shizuoka.jp/kaigosip/Top.do">http://www.kaigo-kouhyo-shizuoka.jp/kaigosip/Top.do</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	セリオコーポレーション有限会社 福祉第三者評価・調査事業部		
所在地	静岡県静岡市清水区迎山町4-1		
訪問調査日	平成23年2月18日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

開設から満7年を経過し、介護5状態の方が半数を超え重度化が顕著になった。重度化は介護スタッフのスキルアップやチームワーク向上に貢献しているし、重度化しても、最期までグループホームで「共同生活」を続けることにはなんら問題は無いのだが、全介助で言葉が失った方の、主体としての認め方や日々の関わり方など転換を迫られている。このため、可能な限り本人の意思確認を直接行い、それに沿うことに努め、外出などを積極的に行うことで閉じこもらないことや、外部の人たちのオープンな受け入れで関わり方の継続支援を意識的に行っている。最近では、全入居者、全スタッフ、多くの家族の参加を得て、一泊の温泉旅行も実現できた。また、個人を大切にしたい関わり方の7年間の成果として、入居前に長年鬱で閉じこもっていた方から、入居から7年を経た今、広島旅行への希望が出てきて、それが実現できたことなどがある。人生カルタ作りも着々と進み、介護スタッフが個人の全体像を掴むことに貢献している。スタッフは仕事量が増す中でも、個々の関わりの中から受ける感動をバネに頭も体も良く動かして定着している。入居者も2年間亡くなる方もなく、この間復活した方も多く、奇跡のグループホームと自称するまでにしている。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「認め合い 支えあい 高めあい」の理念を柱に、利用者ありきの暮らしを支えるアイデアや工夫で肉付けされた運営は利用者重度化の流れの中にあってもグループホーム本来の姿を少しも失っていない。一体管理を排除し、笑いが溢れるホームでは職員が嬉々として介護に勤しんでおり、何よりも利用者一人一人の人生が尊重され人として大切にされている。利用者が折々に発する含蓄ある言葉やユーモアは職員によって拾い集められており、認知症であっても人生の大先輩としての余裕や懐深さが失われていないことに気付かされる。暮れには利用者の居室で忘年会が開かれ、みんなで鍋をつついて盛り上がり、毎月利用者主体の寄り合い会を開く等、取り組みがここには沢山ある。ホーム長の理想を全職員が共感し実現している、感動・感謝・感激に満ちたホームである。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外に行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は別紙のように定めてある。職員には採用当初、研修で伝え、その後は日常の介護実践の中で、また様々なイベントをチームで企画実施することや、毎月のスタッフ会議、日々の感動の共有などを通して伝え、学びを深めている。	「認め合い 支えあい 高めあい」の理念は利用者のみならず職員を含めての実現を目指しており、職員には仕事で迷った時に戻る立ち位置として良く認識されている。一人ひとりの違いを認め、共通の目標に向かい支えあい、利用者をお世話する中で多くの学びや感動をもらいながら殻を脱ぎ成長するさまが数々の資料や訪問時の様子から確認できた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会への加入は今まで認められなかったが、再検討してもらっている。地域の祭りや行事には参加し、歓迎されている。地域一斉清掃、子安神社・観音様・浅間神社・不動尊の祭典、どんど焼き、小学校のPTA活動へのボランティア参加、アルミ缶・古紙集め協力等で、入居者やスタッフが個人名で呼ばれるようになっている。また、ホーム主催の地域行事として、創立記念行事、夏祭り(家族の集い)、動物ふれあい広場、クリスマスコンサートを実施し、地域の方を招き、参加がある。このほか、地元の「寄合どころ」にも招待参加を受けたり、選挙の投票や入居者の出身地の敬老会に出向くなど、市をあげての社会的なイベントにも欠かさず参加している。また、近隣の葬儀のお付き合いも行っている。非常勤職員も地域の方を多数雇用し地元の情報をもらい参加したり、近隣の人たちにボランティアに来ていただいたり、野菜をいただくなどで、つながっている。	昨今あまり見かけなくなった隣近所の付き合いがここには当たり前にある。知り合いのお宅の縁先で海を眺めつつお茶をいただいたり、隣家は家族ぐるみの協力がある。地域行事へ積極的に参加し、またホーム行事に地域住民を招く交流の積み重ねは利用者が外出した際にそこここで声を掛けてもらい、張り合いにもなっている。利用者が施設で暮らすだけでなく、一般の家庭で一緒に暮らしていることが実感できるオープンな地域連携である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
3		<p>○事業所の力を活かした地域貢献</p> <p>事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている</p>	<p>当事業所の設立の目的がここにあり、小人数だが入居のお年寄りの目の輝きを衰えさせない良いケアを実践し整理して外に伝えていくことに努めている。事業所職員は認知症キャラバンメイトに5名が登録されている。地元や市内で行われるサポーター養成講座や、家族介護講座、県立短期大学の認知症講座等で講師を務めて、実践を伝えている。又、ホーム便りに実践情報を載せて、地域や関係者100人余りに毎月届けて広報に努めている。さらに、日常的に市民や近隣の住民、他のグループホームなどの相談やスタッフの実習依頼に応じている。</p>	/	
4	(3)	<p>○運営推進会議を活かした取り組み</p> <p>運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている</p>	<p>2か月に一度の開催を定期に継続して28回に至っている。この場では、過去2か月間のホームの運営方針を具体化した内容や、入居者へのケアの状況、問題点などを伝え、意見をいただき実践に生かしている。また、地元のイベント情報などをいただき参加交流に大いに役立っている。回は重なっても、報告する過去2か月間の活動は変化に富み、入居者の日々変化する状況や介護スタッフの感動が伝えられマンネリすることがない状況にある。</p>	<p>当該期間の利用者の活動状況、事業の運営、職員の待遇に関することまで逐一報告しており、利用者の「抱え込み」を防止するとともに、地域に開かれたサービスで、質の確保を図るために設置するという運営推進会議の目的を十分果たしている。市職員や知見者、地域委員の継続的な出席協力により情報をもらったり、またグループホームの意義と役割の地域への啓発の場ともなっている。</p>	
5	(4)	<p>○市町村との連携</p> <p>市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる</p>	<p>毎月のホーム便りを届けたり、日常の運営上の問題について相談をかけたり、スプリンクラー設置など様々な行政手続きや法令の改正のたびに積極的に働きかけをしている。また、行政からの依頼の認知症講座や、実習生の受け入れ、新設事業者や既設事業所の相談などを引き受けている。今年度は特に他のGHIにおける身体拘束問題について問いかけをしている。また、運営推進会議の際には他のホーム情報で参考になることや、市内の介護福祉情報をいただくよう特に依頼して参加してもらっている。</p>	<p>福祉実践研究会「生き生きクラブ」事務局をホームに置いているため、必然的に行政との接点は多い。認知症への正しい理解を深め、高齢社会を地域全体で支えてゆく必要性を市と共に探り実践する取り組みは全国的にも魁けている。</p>	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	平成15年の開設当初から玄関の施錠は夜間のみとしている。このための単独での外出のリスクは、地域住民の理解と協力で乗り越えている。身体拘束については、書物や研修会への参加で多くの職員が学び、全職員で意識的に取り組んでいる。しかし、最近ベッドから繰り返し転落する方への対応で4点ベッド柵をしようとして、拘束であることに気づき中止したこともあり、目の前に現実が来ると判断できなくなることに気づき、公的チェック機関や相談機関が必要であることを痛感した。	2月でも天気が良ければ開け放されており、利用者はデッキの縁に腰かけて日向ぼっこをしたり鶏小屋へ卵の収穫に出る等、職員のさりげない見守りの中で、閉塞感や不自由な思いを抱くことなく生活している。また職員は過剰な介護が利用者の自立を妨げ自由を奪うことにならないか等、広義に身体拘束を捉えて、常に話し合い学んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待は絶対禁止としている。多くの職員で研修会に参加し意識化と共に、虐待の基になる職員の疲労やストレスの把握と解消に管理者が注意を払い、職員間の認め合い・支え合い・高め合いのためコミュニケーションを増やし、チームワークを取るために様々な仕掛けを工夫している。しかし、近頃職員の定着とお年寄りの安定的な状況下で、「スピーチロック」に近い状況も散見され、注意を促すこととしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者はこれに関する研修に参加し、現在保佐人になって活動し職員にも伝えている。現在利用者の一人は管理者の支援で成年後見制度の手続き進行中である。また、ホーム管理者は、併設する居宅のケアマネにもアドバイスをを行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用開始前の契約時には、重要事項説明書に従い丁寧に説明し契約書を交わしている。その際に疑問や希望などに耳を傾けて応えるようにしている。法令の改定時には、文書でお知らせすると共に、家族会で説明納得していただくようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の意見や要望は、管理者や職員が、個別に訴えがあったときに随時耳を傾けていると共に、毎月の全員による「寄り合い会」で意見を聞いたり、ケアや運営への満足度や疑問、希望を聞き、その内容はスタッフ会議で確認して改善等に活かしている。また、家族会(年1回)の際に意見要望を聞く機会を設け、運営推進会議においても、利用者と家族代表にメンバーに入ってもらったとき、第三者の前でもオープンに話してもらっている。さらに、ケアプランの説明時にも必ず意見を聞くようにしている。	利用者主体の「寄り合い会」が毎月開かれており、苦情や要望等その時点での利用者の思いが表れている。単発で無く継続した取り組みにより利用者の発言が活発になり、心からの声が聞こえる。ここでの発言から広島旅行が実現し、また食事や外出の要望、物音に対する苦情等も運営へ反映している。家族には「みょうが便り」にてホームの様子を逐一知らせており、家族の寄稿もあり、面会時の話し合いや行事の参加も併せホーム運営は利用者や家族と職員の共同作業であることが窺がえる。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員や意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者のモットーが、ホームで一番偉い人にならないことを心掛けており、主にリーダー・サブリーダーを置き全職員の意見の吸い上げシステムを作り、定例のリーダー会議、スタッフ会議(毎月一回3~4時間)で細かな協議を行っている。この場で、職員の意見が活発に出ている。意見や提案などは大方受け入れられている。又随時管理者がスタッフの意見を聞く姿勢を持って臨んでいる。1年に一度スタッフアンケートとヒアリングを行い、この場でも様々な意見や提案を聞くようにしている。また、提案報奨金制度も設けて、積極的に受け入れる姿勢を持っている。	管理者は折につけ運営に関わる自らの気持ちを言葉や文章に顕しており、職員もまた会議での発言や15分スピーチ、「みょうが便り」の編集等に表現の場を持っており、そこからは労使関係で無く同志の思いやりの関係が窺がえる。利用者主体のホーム運営が全員共通の目的であり、そのうえで働き甲斐のある職場であることを職員が認めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		<p>○就業環境の整備                      代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている</p>	<p>ホームの代表者兼管理者は、ケアリーダーサブリーダーと定期的に会議を持ち、一人ひとりの職員の努力や能力発見、善意の配慮などポジティブな面を拾い上げ、認めるようにしている。結果は、提案手当、自己能力開発手当、お笑い手当、失敗手当などの手当てに反映されている。また、定期昇給、手当額の改善も毎年行い、収支ギリギリのところまで努力している。勤務条件については、子育て中の者、家賃が必要な者など個々の実情に合わせて給与や手当の設定をしたり、希望休、夜勤の回数など希望に沿っており、職員納得の上で行っている。また、スタッフヒアリングで、希望を聞いて応えたり、スタッフ間のコミュニケーションの場を誕生会、懇親会などで計画的に設けたり、前向きに働けるよう、クラブ活動の推奨など様々な仕掛けを工夫している。また最近では入居者の全体的な重度化で介護量が増して負担過重になっているため、昼食の調理専門のパートスタッフを雇用して負担軽減を図っている。さらに、有給休暇も取りやすいように非常勤職員も多数確保し、欠員のために他の職員に過重負担にならないよう配慮している。</p>		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		<p>○職員を育てる取り組み                      代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている</p>	<p>代表者はケアリーダー、サブリーダーと共に、職員一人ひとりの能力を判定しながら、職場内研修課題に結びつけたり、資格取得の推奨、外部の研修にも積極的に参加させている。また、職員を育てる最良の方法は、良いケア、良い仕事を実践的にし続けることであることを念頭に置いて日々見つめている。このため、ステップアップのために様々な具体的取組課題をホーム長が提起したりまた、職員の提案を取り上げたりして実施している。これらを具体的に実践した結果、お年寄りの新たな側面の発見や変化、反応に感動したことをスタッフ同士で共有しあい、実践の正しさの確認や、やりがいに結びついている。さらに、これらの実践体験を、毎月のスタッフ会議で伝え合ったり、スタッフ持ち回りの15分間スピーチで発表したり、その内容をホーム便りに載せて多くの人に知らせたりしている。この他に、重度になってもホームでの介護を続けることがスタッフの介護技術の向上に大きく寄与していることが見えている。これらを通じて、スタッフはパワーアップをしている。</p>		
14		<p>○同業者との交流を通じた向上                      代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている</p>	<p>市内と隣市の同業者集団があり、それぞれや合同で研修会や実践報告会、新年会の交流会、2カ月に一度の定例会議、運動会などのイベントを行っている。このほか、現在全ホームと市と協同で介護サービスのスキルアップ事業に取り組んでいる。また、随時、他ホームから管理者や職員が見学・実習などに訪れ、相互に情報交換を行い運営に役立っている。今年度は特に、新採研修を市内ホーム合同で行った。また、ホーム便りを各ホームに毎月送っている。また今年度は、身体拘束の問題や、スプリンクラーの設置工事の関係などの情報交換を行った。さらに、全国・県レベルの同業者集団（GH協会、宅老連）にも参加し、サービス向上のための会議に参加した。</p>		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ホーム入居にあたって、初対面の人には、家族と共に事前に見学を促し、本人納得の上で入居していただくことを原則としている。その際に不安や希望などを聞いたり、事前に自宅訪問で生活状況など把握し、生活習慣やこだわりが入居後も引き継がれるよう配慮している。入居前に、共用型デイサービスを利用していただくと、本人・スタッフ双方にとって非常にスムーズな入居になるので、入居希望者のデイ利用に配慮している。入居直後の不安や混乱には、終日一対一で付き添うなど安定するまで極力濃密なケアに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族とは、事前見学で面接、入居前の訪問面接で細かに不安や疑問・希望などに応え、入居後も面会のたびに代表者や職員が声をかけて、生活ぶりを伝えながら、疑問や希望に応じている。また、極力初期の面会を促したり、不安定な時に、随時の電話連絡での対応や、手紙を書いていただくなどの協力もお願いしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居申し込みの際には、担当ケアマネジャーとも連携を密にし、入居待ちの間の生活の支援方法について、家族・本人の希望を踏まえて、様々な選択肢を提案して選んでいただいている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日常生活を共にする中で、調理、洗濯、掃除、漬物、縫物、など様々な面で、過去の経験や、身につけている技などを教えてもらいながら過ごしている。忘年会は入居者に招かれて、居室で行ったりしている。職員は、重度要介護者から、食事・入浴・排泄・移動介助などを通じて、積極的な反応やリアクションに感動をもらい、共に今を生きている実感や、仕事への勇気やエネルギーをもらっている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居後に疎遠になりがちな家族にも、日常生活ぶりを口頭や、ホーム便りなどで伝えながら、本人の不安や体調の変化などで家族の協力が欲しいことなど伝え、関係を作っている。また、最期の看取りなどについても随時話し合い、互いに悔いの残らない介護をしていくよう話し合っている。この他、家族を交えてのイベントも企画実施している。家族にイベントのボランティアとして協力ももらっている。現在ホームに来訪する面会者は、毎日平均1～2名(月間数十名)となっている。年末年始やお盆に家族のもとで過ごすように勧めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居前の人間関係を途切れないように、美容院、病院、近隣の友人知人宅へ出向く支援、社会的な活動集団(趣味の会、踊りの会、民生委員、教師の会、仕事の同僚)の人たちをホームに招いたり、誕生会に合わせて友人と外での食事を実施したり、出身地の敬老会に出向くなど支援に努めている。お年寄りがなじんだ地域のお祭りにも欠かさず参加し、夜間のお祭りにも参加して、行きなれた街の食堂で会食して、記憶にある街並みを見ながら思い出話が弾んだり、お祭り見学しながら多くの知人と会って楽しい会話を交わしたりしている。が、家族として会わせたくない人もあり配慮が必要である。	利用者の笑顔を引き出そうと、生活歴から”馴染み”を探しては利用者の記憶に呼びかけている。夜祭りの雑踏や匂いの感覚、或いは利用者の故郷の民謡を職員が踊って手繰り寄せる懐古の思い等職員も反応を楽しみつつ工夫を重ねている。利用者の誕生日に友人を招く際には送迎まで含んだ支援で馴染みの方々が訪問しやすい状況を作っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合う者同士のペアが何組かできていて、支え合いが日常的に見られる。重度になり会話もできなくなると孤立しがちになるので、外出や行事、レク等の集団活動を活用して、支え合いの場作りや、互いの存在を意識できるようにしている。反面、関わりたくない人や喧嘩したり非難し合うような関係もあるが、集団として当たり前の状況として見守っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	過去に在宅復帰した方に、職員が復帰後の介護支援を行ったり、3年前遠方の病院に長期入院で退居になった方の家族に、連絡を取って様子を聞いたり、その家族がホームに立ち寄って、職員や入居者と会話したり行われている。また、亡くなった方のご家族は、毎年梅狩りに招待してくれたり、毎年ホームへの届け物や、イベントやマージャンボランティアなどに協力もしてくれている。ホームからは、便りを毎月お送りしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	自発意志を抑えず、管理を可能な限りしないことで、重度の方でも自然に生活習慣ができ、一人ひとりの思いが表情や行動に表出されるのでそれを受け止め大切にしている。重度の方で意思表示ができない場合は職員の選択によることもある。また、入居当初、家族にアンケートをお願いして過去の暮らしぶりや生活習慣やこだわりなどの把握に努めている。	職員は利用者一人ひとりに対して常にアンテナを張って行動や言葉をキャッチしており、情報は記録に残し全職員で共有している。利用者のやりたいこと、行きたいところ、観たい物の希望はすぐ実行して、機会を逃すことの無いよう取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前アセスメントや、入居当初にお願いする家族アンケートで、趣味特技をはじめ、生活歴などを把握し、ケアに生かしている。入居後は、回想法等で引き出している。その結果は、誕生祝のメッセージカードに記されたり、人生カルタになったり、ケアプランに盛り込まれたりしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員は、一人ひとりの日常に関心を持ち、クラブ活動や生活活動を通して、持ちえている能力の開発や把握に努め、ケアに活用している。随時変化する心身の状況は、管理者・スタッフ間で共有し合い、記録にとどめ、次期ケアプランへの反映に努めている。重度の方についても、食事介助での口の開け方や食べるスピードなどから、本人の好き嫌いや体調の表現力としてしっかり受け止めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	管理者や計画作成担当者と、ケアリーダー、個別担当者で、ケアプラン作成や定期的の見直しを行っている。必要に応じて、本人や家族、看護師の同席などもいただいている。介護計画には表現されていないことや、話し合いでは見いだせないお年寄りの本当の意向やこだわり、守ってほしいと思われる生活習慣は日常のケアの中からスタッフが細かく把握し意識してケアを行っている。	利用者本位の日々の関わりと職員の観察眼により利用者の状況は良く把握されており、それらを踏まえ、毎月のスタッフ会議で個々についてモニタリングを実施している。細かな変化や要望を捉えた、今一番相応しいケアが検討されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子を個別介護記録に残して、職員間で回覧し共有している。また、特に重要で急を要することなどは、連絡ノートで全職員に伝わるようにしている。この記録を基に、一か月ごとのまとめと3か月ごとのケアプランの振り返りを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	グループホームは、入居者の全生活を支えていることから、個別に随時起きるニーズに対応している。医療機関への家族に代わっての定期受診介護、知人宅への送迎、個人的な買い物介助、墓参り介助、その他個人的な要望への支援など。成年後見制度、障害者制度などに関して家族からの相談に応じたり、重度化に伴う医療機関とのパイプ役（食道ろうの方の受け入れなど）、や地域とのつなげ役など行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	自治会、学校、PTA、地区社協、民生委員、地域寄り合い処、婦人会、農協婦人部、在宅介護支援センター、地域包括支援センター、行政、公民館、医療機関、介護事業所、福祉施設、ボランティア、地元職員など関わりがある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は、入居前の医療機関を原則としている。家族や本人の希望があると、それに沿っている。入退院の面談にも家族と共に職員が参加し、医療との連携に努めている。定期受診には家族介助を基本としつつも、できない場合はホーム職員が付き添うなど、現実的な対応を行っている。	かかりつけ医は入居前からの本人の状況をよく把握している。また、ホームでもよく利用者を把握している医療機関の受診を原則としている。受診時は家族に付き添ってもらいが、家族の都合が悪い時などは職員が同行しており、柔軟な対応ができています。看護師との連携も図られている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療連携体制で訪問看護ステーションと契約しており、職員は入居者の心身の変化を観察し、必要に応じて、24時間体制で相談に応じてくれる看護師に連絡を取って、受診などの確な対応に努めている。また、日常気づいたことなどは、健康管理連絡ノートに記録して、看護師と介護士との連絡を取っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院の際は、医療機関との連携と、家族との連携を密にしている。また、早期に退院できるように医師との連携やホーム内の受け入れ体制整備に努めている。入院治療の終了の見通しが立った時点で、家族の希望に添えるようホームでの退院後の受け入れ態勢や医療機関の支援について協議している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居者が重度化した場合、医療への受診を促すとともに、医師から予後指導を受け、ホームでの介護が可能な条件の提示と今後のホームにおける生活でのリスクと他のサービスの利用について説明する。その後、家族全員の希望をまとめていただくとともに、職員会議での話し合いを基に、管理者、ケアリーダー、家族、看護師で話し合いを持ち、双方の理解と納得の上で引き受けることとしている。現在、食道ろうの方をはじめ、4名の方の支援を行っている。	以前にターミナルケアをしたことがあり、マニュアルも作成されている。利用者が重度化した場合は医師の判断を仰ぎ、ホームでの介護が可能かどうかを話し合い、協議する。家族には、家族全員が同じ希望であるかを確認する。重度化した時には夜間体制も2人対応など勤務も工夫している。家族も泊まり、一緒に過ごすことが出来るような支援もしている。	重度化や終末期のケアには職員は前向きで、最期までこのホームで過ごしてもらいたいとの思いもあるが、医療面での課題もあり不安を抱えているのも確かである。医療面での職員の不安を少しでも除くために、看護師による勉強会も予定されており、チームとしてさらなるスキルアップすることに期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	利用者の急変や事故発生時に備えて、看護師、管理者への緊急連絡体制の整備と対応マニュアルを整備し、職場内で全職員を対象に徐々に研修を行っている。が、実践力を全員が身に付けているとは言い難い。が、どこまでの実践力が求められているのかと身につける方法が不明で悩んでいる。	/	
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災と地震については想定避難訓練を年間2回行っている。防災計画を消防本部に届け出た。昼夜を問わず、全職員が、想定できない実際の災害時に、的確に利用者の安全保護を行うには、困難があると思われる。地域、近隣には協力体制がある。また、現在スプリンクラーの設置工事中で火災対策は強化される。災害備蓄品についても、食料や機器の整備を行った。	防災訓練は年2回消防署に防災計画を届け出して行われている。スプリンクラーの設置もされ、災害対策は強化されている。防災訓練時には地域の人達にチラシを配布したり、近隣の人達には声を掛け協力を仰いでいる。そのためか、近隣の人達も協力的で自分の家の庭先を避難所に提供し、家族中で応援体制をとってくれている。水や食料等の備品も用意されている。	協力してくれる近隣の人達との信頼関係が出来ており、家族中での協力も仰げる。そのため、近隣の人にしてもらえる役割分担が出来れば一層力強い応援が受けられるように思える。また、新しい地域の人との合同訓練の実施に期待する。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	集団ケアや、一律平等主義的ケアは行っていない。職員体制や能力の範囲内での可能な限りの一人ひとりの思いや、生活習慣、自発行為などを侵害しないように努めている。重度化しても人としてのプライドを失っていないことを意識して関わり、言葉を失った人でも本人の意思を表情や行動から判断して尊重した対応を取っている。一泊旅行への参加意思、お祭りで好物の焼きそばを食べに出かけることなどの意思を確認してそれに従っている。個別の疾病情報、家族や経歴などのプライバシー情報については、本人の心を傷つけないよう配慮している。	利用者一人ひとりの生活習慣や思いなどを尊重し、利用者の人格や誇りを傷つけない言葉掛けや対応に配慮している。日頃の会話の中で利用者の思いに耳を傾け、本人の意思を表現できない利用者には、その人の行動や表情から感じ取り対応をしている。個人のファイルなどのプライバシー情報も適切に取り扱われている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	牛乳(飲み物)の自由化を行っている。(本人の決定によって、好きな時に、好きな所で、好きな飲み物を好きなだけ飲む状況作りをしている)。また、自由絵画をはじめとした、芸術活動等で本人の思いを表現してもらい、そこからのメッセージを職員が受け止めケアに生かしている。希望は管理の強化で失い、全てが今のままで良いと認め続けられる人間関係の中で湧いてくることを職員が知っていて実行している。希望は日常の中で察知し、誕生会などのイベントを通して、遠慮がちだが随所で出ておりそれを可能な限り受け止め応えている。また、自治会(寄り合い会)も毎月一回開いて、自分たちの生活は自分たちで決めていただくという姿勢で自由に意見を言っていたいて耳を傾けている。最近では、利用者の希望で広島への「反戦平和修学旅行」の支援を行った。また、重度化した方々にも可能な限り、自己決定のための働きかけをあきらめずに行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	重度化して意思表示が十分できない利用者に対して、本人の希望を受け止めて、職員の都合でケアしていないかは常に課題として悩んでいる。活動的な入居者に対しては、日々のその人らしい暮らしの支援をしているかと問われると、集団生活という制約、職員が1対1でないことなどの条件から十分ではないと思われる。が、可能な限り沿っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	日常的には普段着、かなり頻繁に行っている外出時には外出着、ハレの日(誕生祝の会、ホーム創立記念日イベント、家族の集い会、地域交流会、)にはおしゃれ着とお化粧品など支援し、夏祭りには浴衣など変化を持っている。散髪、整髪、毛染めなども希望により支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	<p>食事作りは、そば・うどん打ち、お好み焼きなどをはじめ、毎回入居者と共に行っている。車いすなど重度の方にも、可能な限り手を出していただく機会を作っている。片付けは、入居者が自主的に行っている。メニューは、それぞれの嗜好に沿っている。食事環境についても配慮し、ホーム内では、テレビは消し、誕生会やイベントの食事は、テーブルカバーや花で飾りをしたり、バイキング形式をとったり、職員が様々な外国料理を作ったりで変化を持って楽しんでいる。また、ペランダでの食事や流しソーメン、芝生の庭で太陽を浴びてのガーデンランチなどで楽しみ、外食の機会を設けたり、弁当持参で花見や公園でのレクリエーション、ピクニックなど多彩に行っている。そこでは、普段自ら食べない人が箸を持ったり手づかみで食べ始めたり、お代りをする姿など感動的な場面が詰まっている。重度化して普通食を食べることができなくなった人には、とろみをつけたミキサー食も、好みの味付けで対応している。また、食道ろうの方も昼食時には食堂でにぎやかな会話を耳にしたり、食事のにおいを感じながらラコール食事をとってもらっている。</p>	<p>職員は普段の観察の中からの気づきを大切にし、嗜好調査も行っている。食べることを何よりの楽しみにしている利用者の食欲が落ちた時などは、職員間で話し合い、その利用者の好きな食べ物を出し食欲を戻す工夫もしている。ウッドデッキに出て流しそうめんをしたり、芝生の庭で太陽を浴びながら弁当を広げるなど、ゆっくりとした時間を過ごしている。食道ろうの利用者に食堂で仲間の会話を楽しみ、食事のにおいを感じながら食べる楽しみを感じてもらおうようにしている。食事の準備や後片付けなど個々でできる事をやり、みんなで楽しみながら和気あいあいと行っている姿が拝見できた。</p>	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	<p>介護度が増してきた方には、食事、水分摂取量のチェック表をつけて不足しないように注意している。体重測定なども目安に、栄養不足にならないよう配慮している。また、訪問看護師にも観察してもらい問題があればアドバイスももらっている。摂取が十分でない人には、夜半や食事時間以外でもカロリーや水分補給に努めている。が、摂取量オーバーの人への対応に苦慮している。</p>		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔内の清潔保持支援は、必ずしも毎食後ではなく、過去の生活習慣や個別の能力や状態に合わせて行っている。重度になり十分な清潔保持ができない方は、歯科医を受診し口腔ケアを受ける支援をしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄は最優先の介護としている。失敗やおむつでの排泄はプライドを傷つけ、混乱を増幅し、受け身になり生きる意欲を減退させるものとの認識に立って行っている。老衰によるターミナル期に入っても亡くなる3日前まで、本人の意思でトイレでの排泄介助をし笑顔と感謝の言葉が出た。必要な方には排泄チェック表をつけて排泄リズムをつかみ、可能な限り普通のパンツで過ごすことを目標にトイレ誘導を行い、紙パンツ等は外出時などの安心の為の使用に心がけている。	以前、老衰で亡くなる3日前まで本人の意思でトイレでの排泄の介助の支援をしたことがある。可能な限りトイレでの排泄は当たり前のことと考えられている。職員は本人の意思でトイレに行くことを促しており、個々の排泄パターンを排泄チェック表にて掴み、失敗してもプライドを傷つけない介護を心掛けている。トイレは介護度が高い利用者への2人介助でも十分対応できる広さがあり、整頓され掃除も行き届いている。排便は薬に頼らない自然の排便を心掛けており、食事には、繊維質のものや水分などに気を付けている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘は体調だけでなく認知症状をも刺激するので、排便は毎日チェックしている。健康な便を作るために食物や水分の摂取、運動に配慮している。また、薬によるコントロールは最小限にしている。薬で常時下痢状況だった人には、医師、家族と相談の上、薬の飲み方を調整することで、普通の便になっている。また、便秘の後、排便ショックを起こす方には、医師に相談後便秘予防薬を処方してもらっている。スムーズな排便のために腸のマッサージも試みている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は、本人の希望時間に浴うこととしている。湯温や湯量、入浴時間などでもできる限り本人の希望に沿っている。介護度の高い方は、一日の中で職員体制が整っている時間帯で二人体制等で入浴介助を行っている。入浴剤の利用や、ゆず湯なども行い、楽しむようにしている。入浴中は会話や歌などでスタッフと共に楽しみながらゆったりと入れるようにしている。しかし、入浴拒否がある人への対応には苦慮し、タイミングを計るなど様々な工夫を試みている。	入浴は希望する時間に入れるように支援している。季節折々の楽しみとして、柚子湯の提供や入浴剤を利用し、利用者が入浴を楽しみながらゆっくりと入れるような工夫がされている。入浴拒否の利用者には、さりげない声掛けやタイミングなどを考慮しながら工夫をしているのが伺えた。浴室の脱衣所には、利用者職員との手作りのパーテーションが置かれ、さりげない心配りが伺えた。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間不眠の場合は日中に休んでいただいたりするが、外出や活動に誘って夜間睡眠がとれるよう働きかけている。就寝時間もそれぞれの習慣で行っている。午後8時から10時ころまでまちまちである。安心して休めるよう、光や音、かけ物、湯たんぽなど季節に応じて対応している。重度の方で日中も傾眠傾向が見える方には随時ベッドでの休息支援を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	9割以上の方が服薬している。自己管理は全員が不可能の為、すべて職員が支援している。薬の作用副作用などの効能は、薬剤師の発行する薬剤説明書にあるものを職員全員が読み、理解している。症状の変化にも注意し、変化のあったときには看護師や医師に報告し指示を仰いでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一昨年から、全体レクや全体行事を減らし、個別や少人数で行う「クラブ活動」を開始した。これにより、入居者一人ひとりの経験や嗜好能力に合わせて、職員の個性も相まって様々なバリエーションにより活発な活動が始まっている。例えば、生活クラブでは、そば・うどん打ち、餃子づくり、お好み焼きなど特技を生かしてもらったり、生物クラブでは鶏を飼い始めて、新たな仕事と役割分担が出来上がっている。三味線クラブでは入居者が何十年振りかではちを持ち、初心の職員と共に練習に励み、元気を増し、ホームに三味線が響き渡る日があり、家族交流イベントの際に舞台発表まででき家族が感動されていた。。	/	
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	一人ひとりのその日のすべての希望に沿うことはできていないが、近所の散歩や、公園に行ったり、近所の別荘の庭にお邪魔したり、ホームの食材の買い物のほか、個人の希望の買い物、知人に会いに行く、ニュースや新聞で話題になった場所に希望で出かける、季節の実感の為に花見、紅葉狩り、ぶどう狩り、イチゴ狩りなど希望の場所に外出する、希望によって外食をする、歴史散歩をする、文化会館での催し物に参加する、様々なお祭りに参加する、地域行事に参加する、お墓参りをスタッフとする、家族とホーム職員で日帰りや宿泊温泉旅行をする、夜間のイルミネーションツアーやホテル狩り、夜祭り、居酒屋など、外出は盛りだくさんである。最近では広島旅行を希望で支援した。	ホームの近隣は静かで車の通りも少ないので、日常の散歩やホームの食材や個々の希望の買い物など職員が同行し、日常的に出掛けている。新聞で話題になった場所に出掛けたり、近所の別荘の庭にお邪魔することがある。花見の季節には花見に、紅葉狩りの季節には紅葉狩りに、夜間のイルミネーションの見学や日帰り温泉、宿泊での温泉旅行など外出するプランを多く計画し支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		<p>○お金の所持や使うことの支援</p> <p>職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している</p>	<p>職員は金銭トラブルを回避したが、ホームの方針として、ご家族に理解と協力をいただき、できる限り本人にお金を持っていただくように勧めている。紛失や盗難騒ぎなど保管にトラブルがあるが、職員との触れ合いの好機として、話を聞き共に探すことにしている。外出の際には財布と現金を持っている。外出の際には財布と現金を持っている。買い物の機会を作る。お金の使い方を忘れていたり、家族やホームへの土産などを買う姿はうれしい。このほか、金銭に関する刺激を目的に、節分には現金をまき、イベント時に現金つかみ取り、お祭りに行ってお小遣いをあげるなどで現金を手にしてもらい、その後、職員と共にコンビニなどに買い物に行くこととしている。</p>		
51		<p>○電話や手紙の支援</p> <p>家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている</p>	<p>電話は無料で、職員に監視されずに、いつでもかけられるようにしてある。家族との電話でのやり取り、時に手紙や年賀状のやり取りなど支援をしている。親族から果物が送られてきたり、誕生日のプレゼントが届いたりしたときには電話や手紙で直接本人からお礼を伝える支援をしている。</p>		
52	(19)	<p>○居心地のよい共用空間づくり</p> <p>共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている</p>	<p>居心地の良さは個々に違い、特に共同生活における、音や光・温度などは難しく、職員の判断によっている。大方の人は楽しそうに過ごしていても、共用空間の人混みや雑音を避ける人もあり、やむを得ない状況もある。その他は、不快な環境についてはできる限り排除するよう心がけ、草花や季節感のあるものなどを飾ったりしている。冬場は椅子使用のため足元が寒いことから、テーブルの下に炬燵をセットしたら、快適のようである。</p>	<p>共有空間の食堂兼リビングは、薪ストーブと手作りのテーブルが置かれ、明るく親しみやすい雰囲気である。その中に畳の場所もある。冬場は椅子使用のため、足元が寒いのでこたつがセットされたりと利用者が快適に過ごせるよう工夫されている。ウッドデッキはリビングから野外に直接出れるように段差もなく利用者が気楽に利用し、日向ぼっこなどを楽しんでいる。愛犬も利用者の膝の上に座ったりと利用者が自然に集い、心地よくくつろぐ姿が確認された。</p>	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ベランダや玄関外にはベンチとテーブル、室内の廊下にもベンチとテーブルを配置し、少人数で気の合った人同士が集ったり、一人で外を眺める人がいたり、職員と共に語り合ったりしている。入居者同士が居室で語り合っている姿も日常的に見られる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室の必要物品は、原則個人が使い慣れたものを持ち込んでいただいている。仏壇と位牌や古い筆筒、テレビ、ベッド、炬燵、アルバム、賞状類などがある。	居室には馴染みのベッドや長年愛用した家具、仏壇や位牌が持ち込まれている。また、昔の思い出の写真や家族と一緒に写真などが飾られたり、思い出の品も大切に置かれ利用者が居心地良く安心して暮らせるよう配慮されて、各自の生活習慣に合わせた居室作りがされている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自分の居室、トイレ、エレベーター、一段の高さが低い階段、手すり、段差の解消、居室内のカーテンの色と壁紙の変化などそれぞれの判断で使用している。判断が十分でない人の為に、個別に居室に名前表示や、トイレ表示などを行っている。		